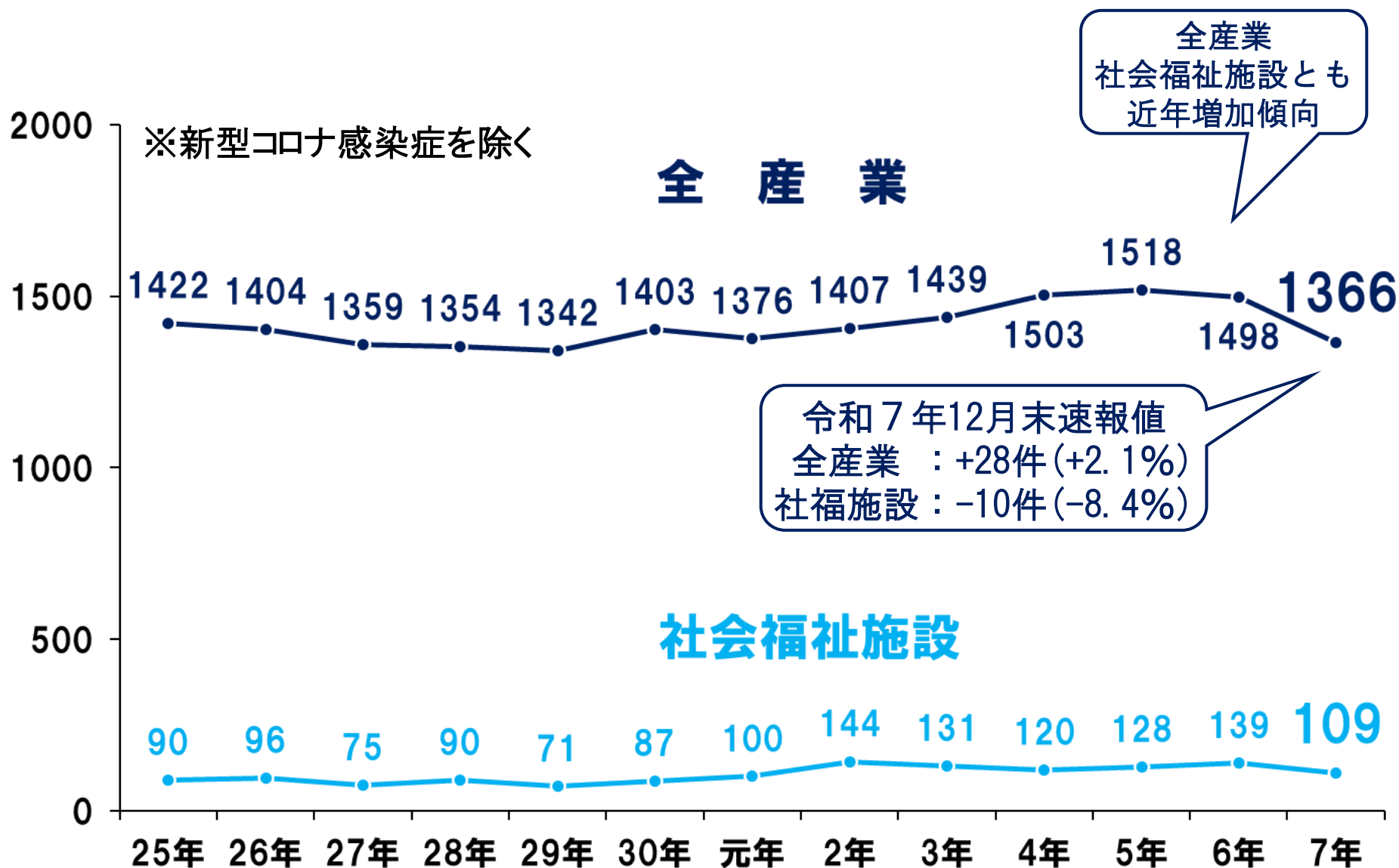


社会福祉施設 における 労働災害防止対策

東近江労働基準監督署

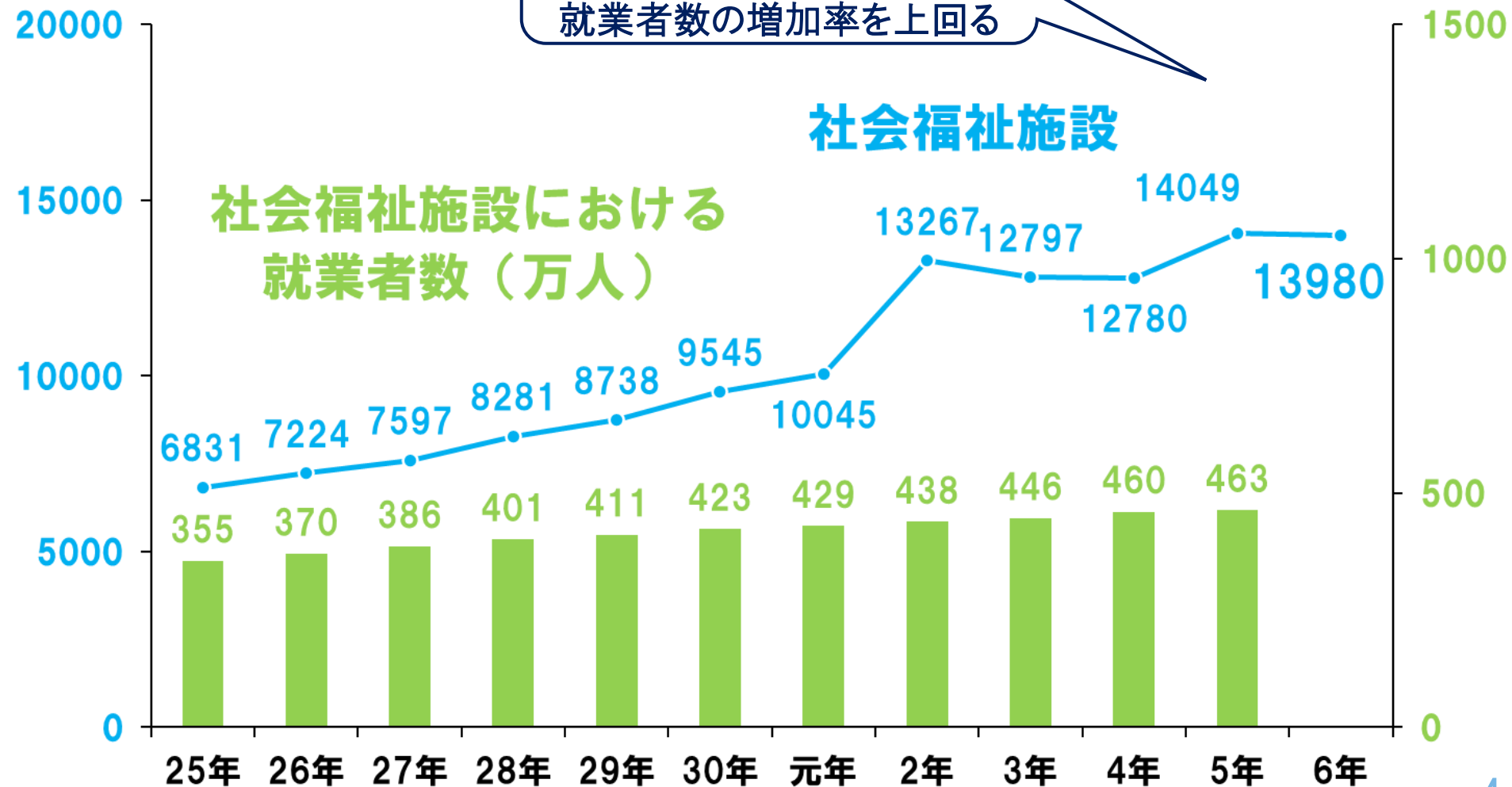
労働災害発生状況

死傷災害発生状況の推移(滋賀県)

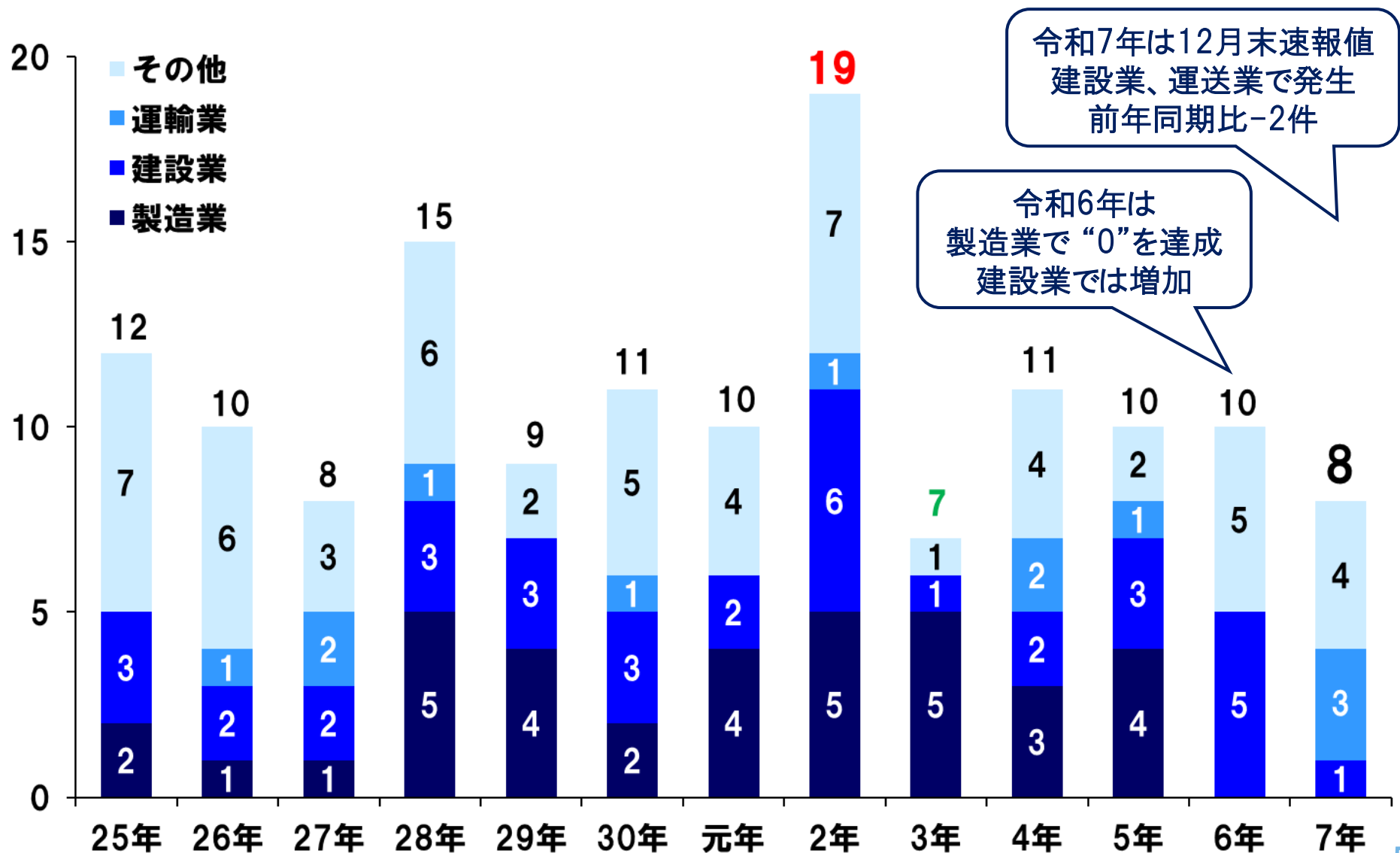


労働災害発生状況の推移(全国)

10年間で2倍以上に増加
新型コロナを差し引いても
就業者数の増加率を上回る



死亡災害発生状況(滋賀県)



社会福祉施設で多い労働災害の型

◆令和6年（社会福祉施設、滋賀県内）

合計 139 件（前年比 +8.6%）

※ 別に新型コロナウイルス感染症によるものが28件

（内訳）	1 位	<u>動作の反動</u>	48 件
	2 位	<u>転倒</u>	45 件
	3 位	激突	10 件

動作の反動型災害（災害性腰痛）と転倒災害が圧倒的に多い。

これら災害の防止対策が特に重要

社会福祉施設での災害の負傷程度

◆令和6年(社会福祉施設、滋賀県内)

- 死亡災害 0件(過去10年間で0件)
- 全休業災害 139件
平均休業日数 37.2日(最長8か月)
- 動作の反動災害 49件
平均休業日数 36.1日(最長8か月)
- 転倒災害 45件
平均休業日数 43.5日(最長5か月)

高齢労働者の休業が長引く傾向がある

重症災害の災害事例

◆平成22年12月発生(知的障害者通所施設)

被災者は通所する利用者の作業、生活の支援業務に従事していた。担当する利用者とともに施設内を移動していた際、1階から2階へ階段を上ろうとしたところ、利用者が不規則動作を行ったことで、被災者はバランスを崩し、階段上から転落、後頭部を強打し、意識不明状態となったもの。

災害発生原因として、不規則動作を行う可能性がある利用者を介助しながら階段を上がろうとしたこと、踏ん張りの利かないスリッパを履いていたこと、が考えられた。

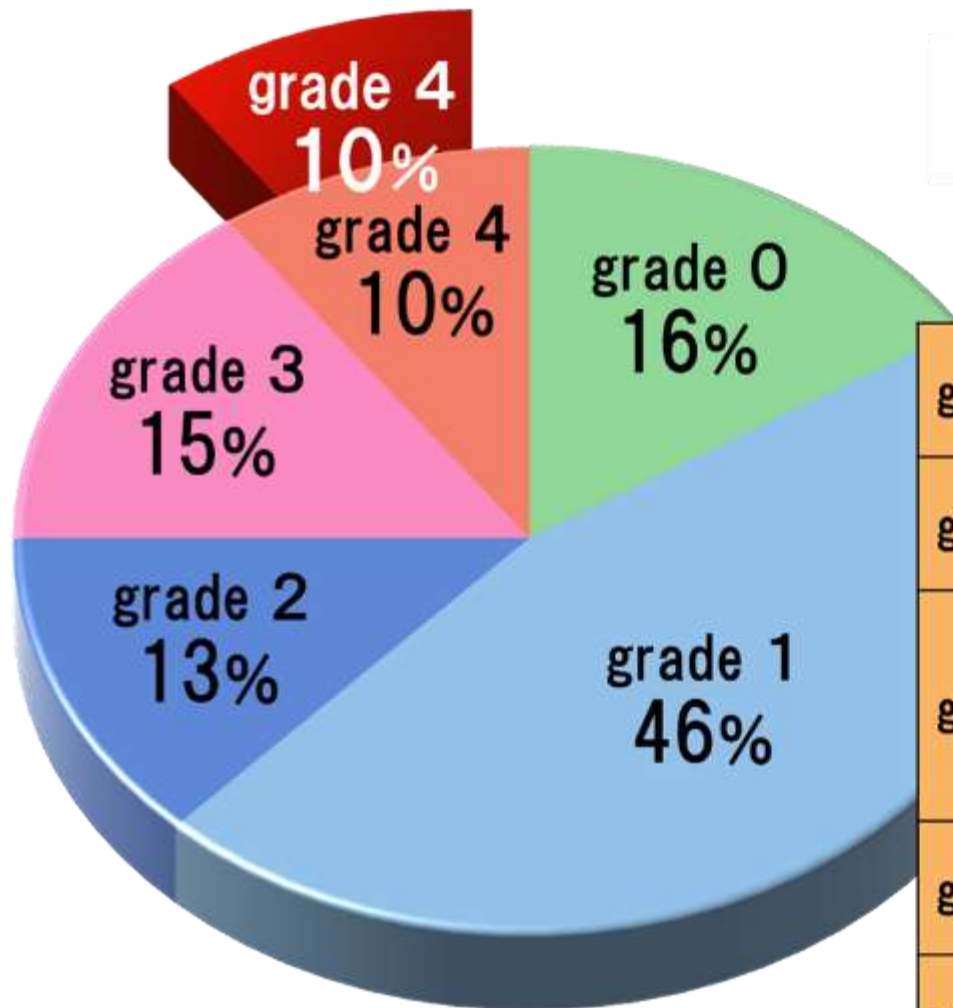
腰痛災害防止対策

腰痛とは

一般に腰痛とは、ぎっくり腰（腰痛捻挫等）、椎体骨折、椎間板ヘルニア等の総称であり、様々な原因で発生し、特定の症状のみを指している訳ではない。また、腰痛の痛みの範囲は、腰部のみに留まらない場合もあり、膝関節より下部に、痛みやしびれが発生する場合もある。

腰痛に密接に関係する身体の構造として、脊椎の各椎体間の軟骨である椎間板、椎体の周囲の椎間関節、じん帯、筋肉があり、腰痛とは、これらの構造に障害が生じた際に、発生する腰部の痛みである。

一生を通じて腰痛になる割合



全人口の83.4%が
一生に一度は腰痛になる

grade 0	腰痛なし
grade 1	支障のない腰痛
grade 2	支障はあるが仕事などを休まなかった腰痛
grade 3	連続4日未満休んだ腰痛
grade 4	連続4日以上休んだ腰痛

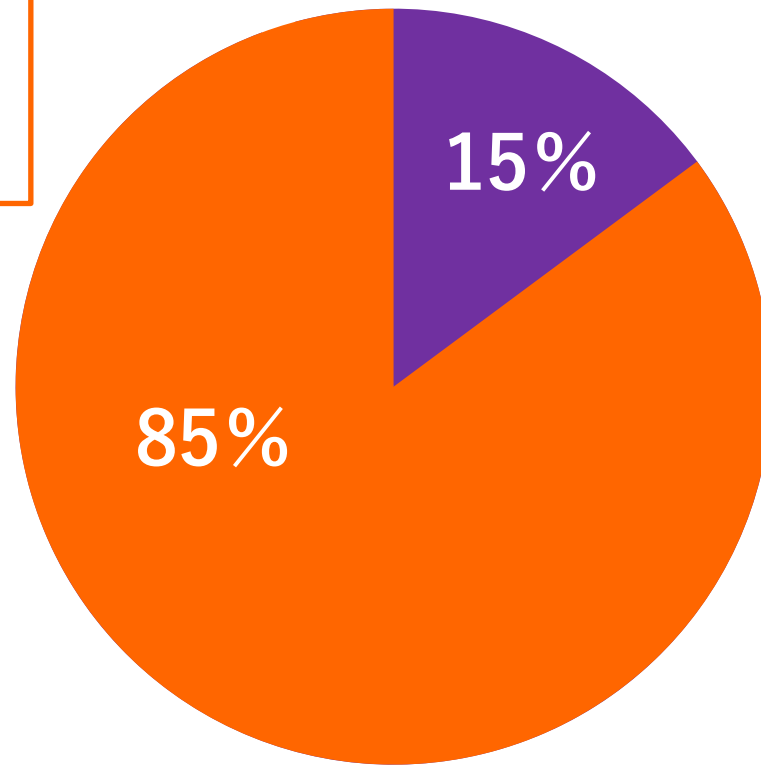
腰痛の分類

非特異的腰痛

ぎっくり腰、筋膜性腰痛など原因がはっきりしないもの

特異的腰痛

椎間板ヘルニア：5%
脊椎管狭窄症：5%
圧迫骨折：4-5%
がん・感染症：4%
大動脈瘤：1%



労働衛生 3 管理

腰痛災害に限らず、労働災害を防止するための労働衛生管理上の手法として、労働衛生の3管理という考え方がある。

労働衛生 3 管理に加えて、各作業者に対する腰痛予防のための教育、リスクアセスメントを展開することが腰痛予防対策として有効と考えられています。

- 作業管理
- 作業環境管理
- 健康管理

＋ 労働衛生教育、リスクアセスメント

腰痛災害発生に係る 3 要因

- 動作要因（作業管理）
 - 作業姿勢
 - 重量物の取扱作業
 - 作業頻度 等
- 環境要因（作業環境管理）
 - 作業環境の温度（寒冷環境が悪影響）
 - 車両等の全身振動
 - 床面の状況 等
- 個人的要因（健康管理）
 - 体格、筋力等（腰痛予防体操等）
 - 心理的緊張の有無
 - 既往症、基礎疾患の有無 等

第4の要因

最近では「動作要因」「環境要因」「個人的要因」に加え、第4の要因として、職場のストレスに代表される「**心理的要因**」も腰痛発症に影響を与えられている。

心理的要因には、以下の様なものがある。

- 仕事の満足度が得らず、働き甲斐がない
- 上司や同僚との関係が良好でない
- 利用者等からのクレーム 等

動作要因(重量物取扱作業)

年少則、女性則により、年少者及び女性が直接取扱うことができる重量に制限を定めているが、一般の男性労働者に対する法規制はない。

腰痛予防指針では、人力により取扱う重量の上限値を、成人男性では体重の40%、成人女性では体重の24%としている。

		18歳以上		16～18歳		16歳未満	
		男	女	男	女	男	女
重量 (kg)	断続	—	30	30	25	15	12
	継続	—	20	20	15	10	8

動作要因(理想的な作業姿勢)

腰痛リスクの低い作業姿勢は、力み等がなく自然に正面を向いた姿勢であり、その姿勢を維持するためには、机や作業台を適切な高さに調節する必要がある。

立ち状態、座り状態にかかわらず、肘を机等の上面につけた際に肘の角度が90度程度になる高さが、適切な机、作業台の高さである。

また、適切な椅子の高さは、足裏全体が丁度、床面に着く高さである。

動作要因(不自然な作業姿勢)

腰痛リスクの高い作業姿勢は、上半身が前掲する前屈姿勢、膝関節を曲げて立つ中腰姿勢、上半身と下半身の向きが異なるひねり姿勢、しゃがみ姿勢等が挙げられる。

これらの作業姿勢のまま腰部に荷重を受ける作業を行うことで腰痛発症の契機になる可能性が考えられるため、作業前には、まず姿勢を整えることが重要であり、作業を行う際は、急激な動作を避け、膝の力、動作で作業を行うことを意識し、また、下腹部に力を入れながら行うこと。

動作要因(拘束姿勢)

立ち状態、座り状態において、長時間、静的作業姿勢（拘束姿勢）を取ることが腰痛発症リスクを増大させる。

立ち状態で同じ姿勢を取り続けなければならないことも多いと思われるが、具体的対策として、片足を乗せることができる台等を設置し、姿勢を入れ替えることができるようにする、座面の高い椅子を設置し、座って作業ができるようにする等が考えられる。

また、長時間の座り状態での作業は、適宜立ち上がり、座り続けないことが重要である。

不自然な姿勢時の背骨の形状

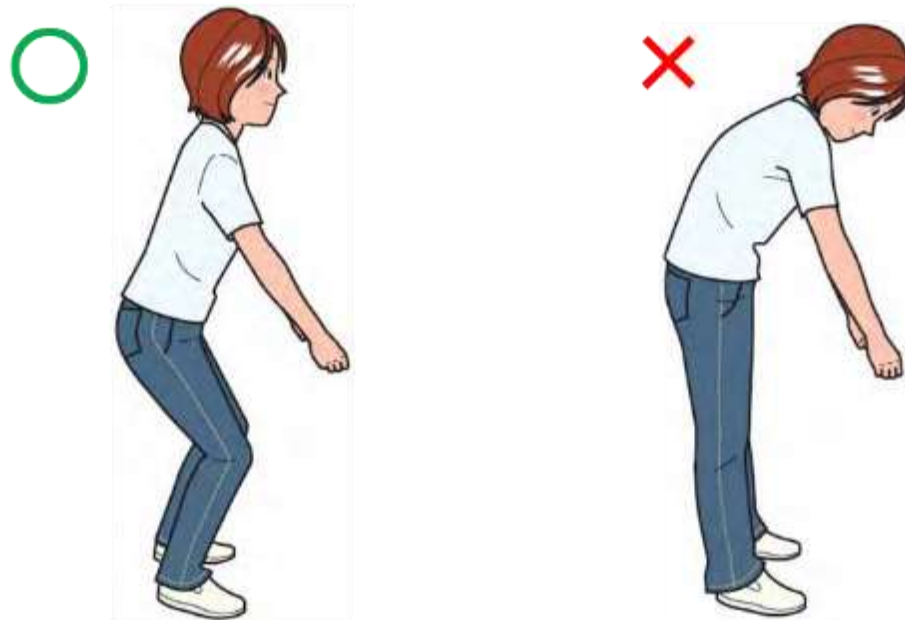
上半身を前傾する前かがみ姿勢や、膝を曲げた中腰姿勢は、不自然な姿勢であり、腰部への負担が大きい。

これらの姿勢を取る際に望ましいのは、背骨の形状が後弯状態ではなく、前弯状態が保持されている状態である。



基本となる作業姿勢

立った状態で無意識に前かがみになると、背骨が後湾状態になりやすいので、バレーボールのレシーブの姿勢を意識し、腰椎が前弯した状態を保持する。



座り状態の作業姿勢



イスとの間に巻いたタオルを挟んで前弯状態を維持



猫背状態だと背骨が後弯状態に

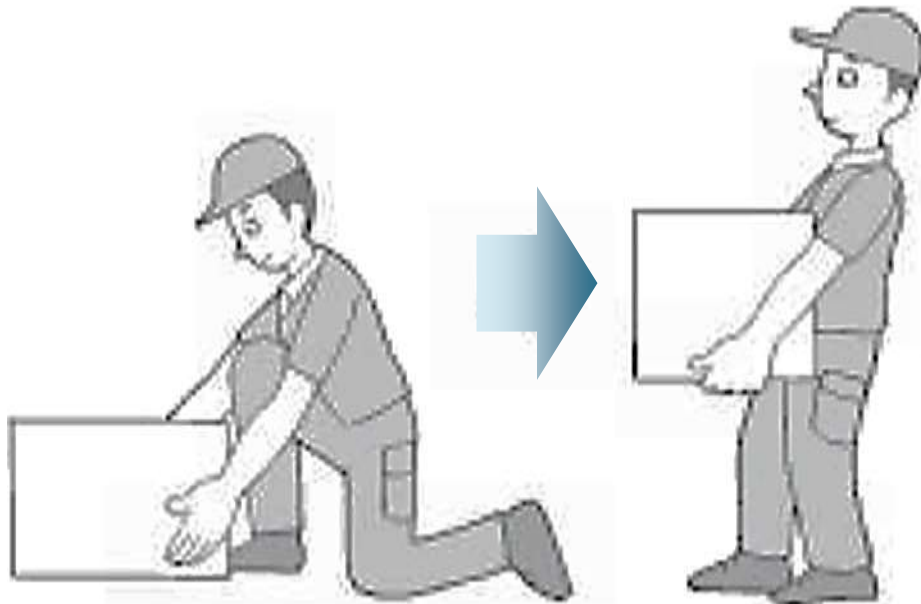


正面を向いてねじれ姿勢を回避

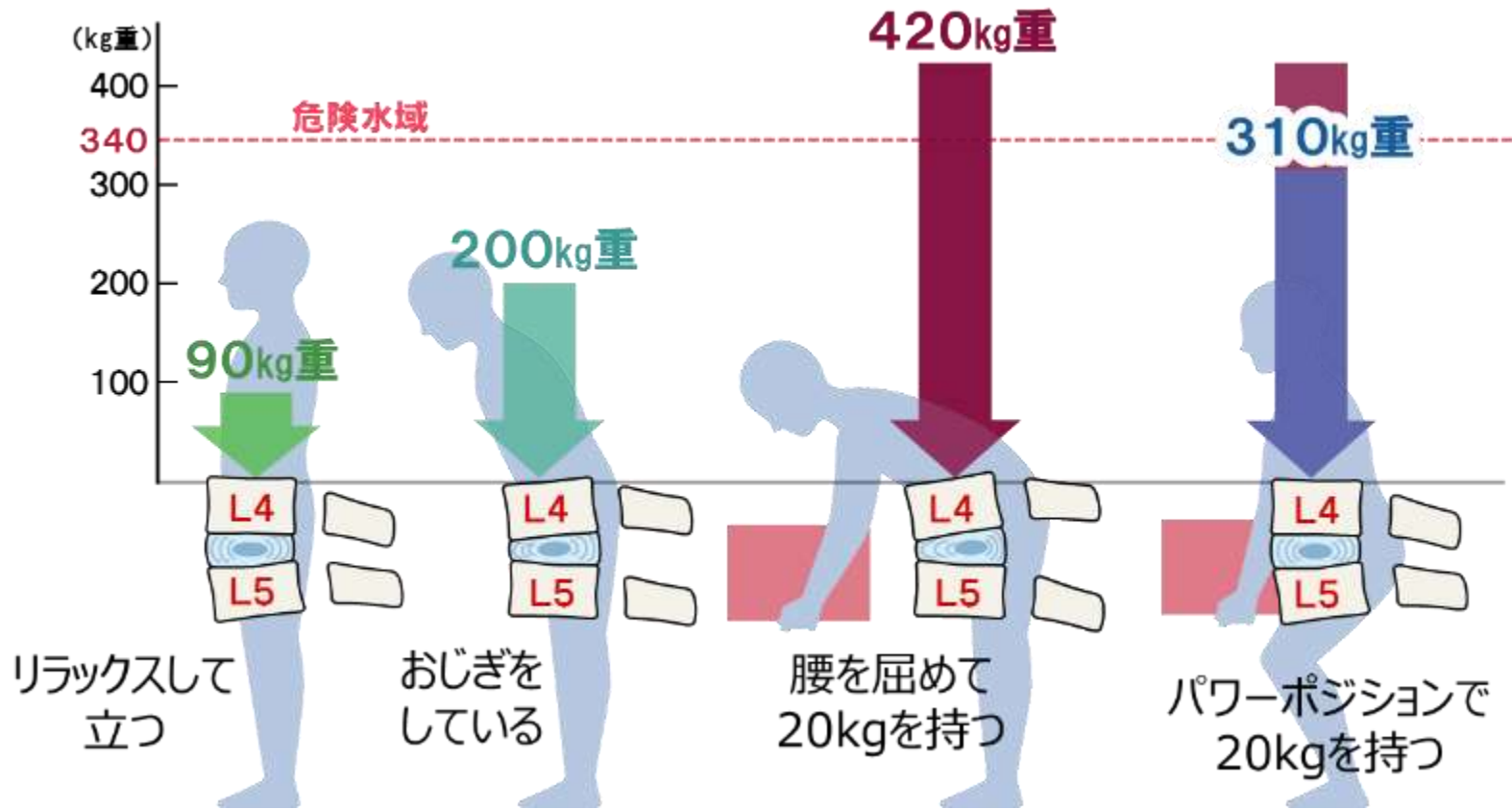
重量物を持ち上げる作業

立った状態から、床上に置かれた物を持ち上げる場合は、片足を少し前に出し、膝を曲げ、しゃがんで物を持ち、この姿勢から膝を伸ばし、下半身の力により持ち上げる。

また、動作の際は、背骨の前弯状態の維持を意識する。



動作、姿勢による椎間板圧力



腰痛が発生しやすい作業姿勢

多くの業種において、腰痛発生原因となった作業姿勢として、**中腰の状態**で身体をねじった**姿勢**が最も多い。

この姿勢が作業上で欠かせない場合は、**中腰とねじりの動作**を分ける対応が必要。



環境要因(作業場所の温度)

作業場内の温度が低い場合、寒冷反射により血管の収縮が生じ、腰部の筋肉、軟部組織が硬直化し、腰痛を誘発する要因となる。

冬季の屋内作業場では、暖房により適切な温度環境を維持することが望ましく、屋外においても防寒着等を着用させることが望ましい。

適切な温度については、作業強度によって筋組織からの発熱量が変化するため、座り作業では高く、重量物取扱作業等では低めに設定することが望ましい。

環境要因(床面の状況)

転倒災害の発生、転倒に至る過程のふんばり等による不自然な力の発生により、腰痛災害が誘発されることがある。

転倒災害防止対策は前述のとおりであるため、床面の凹凸、濡れ等による、つまづき、滑りを防止するとともに、作業場内の適切な照度の確保が重要であること。



個人的要因(腰痛予防体操)

急性腰痛は作業開始から3～4時間の間に起こりやすい。これは、始業時は身体の動作や外力に対する反応性が低下しているためと考えられるが、作業開始前体操を行うことで、筋肉に刺激が与えられ、腰痛予防効果が得られる。

また、体幹、下肢の筋力強化や、股関節等の可動域の増加が、腰痛発症のリスクを低減させるため、日常から、これらを目的とする体操、トレーニングを行うことが望ましい。

これだけ体操

3 秒間
息を吐きながら
最大限に反らす
1 ～ 2 回



転倒災害防止対策

STOP! 転倒災害プロジェクト

転倒災害は、どのような職場でも発生する可能性があり、職場での転倒危険性は、問題意識を持って原因を特定し、適切な対策をとることで低減することができ、安心して働ける職場環境の実現に向けて「STOP! 転倒災害プロジェクト」を展開していました。



転倒災害の分析

●どの様に転倒しているか？

後向きに転倒 36.4%

前向きに転倒 32.5%

横向きに転倒 9.8%

●何が「原因」で転倒しているか？

「すべり」 : 床面の濡れ、凍結 等

「つまづき」 : 床面の段差、凹凸 等

前向き転倒災害

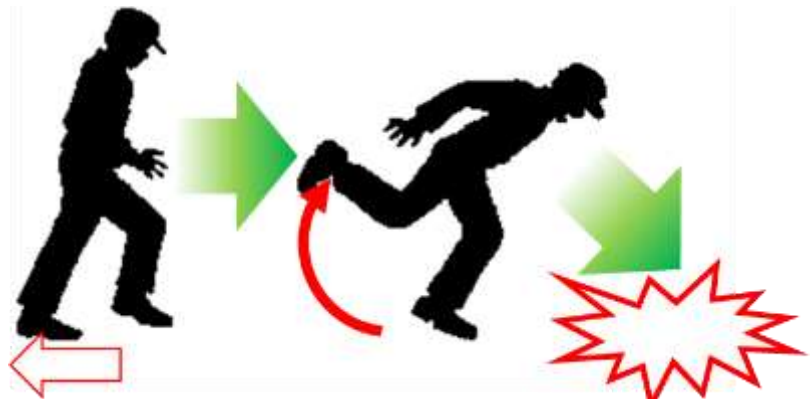
前向き転倒災害の原因は、大きく2パターンに分かれており、床面の段差、凹凸等による「つまづき」と、後向き転倒と同様に床面の「すべり」によるものであった。

その他、駆け足時等の際の脚のもつれによる転倒も多数発生していた。

主な負傷部位は、ひざ、手、上腕、顔、胴体等であった。



後足が滑ること
で前方方向に転倒



後向きの転倒災害

後向きの転倒災害の原因の大半は、床面のぬれや路面の凍結等による「すべり」によるものであった。

負傷部位として、腰部、ひじ、手首、後頭部が多い。

転倒防止対策として、床面の清掃、安全靴の見直し等が考えられる。



側面向きの転倒災害

側面方向への転倒災害は、前向き、後向きに比べると件数が少なく、大半が自転車等の搭乗中、設備間の狭隘な環境を移動中や側溝に足を取られる等といった、**作業者と床面以外の要素が関係する**状況での転倒災害であった。

その他・不明は、移動中に意識を失う等の例外的な転倒災害や災害発生状況が不明のもの。

転倒災害防止対策（ハード対策）

- 段差、隙間の解消（スロープ等）
- 適切な照度の確保
- 転倒危険箇所の抽出
- 注意喚起表示
- 滑り止めマットの設置

安全、衛生管理者等は、事業場内の巡視の際に転倒危険箇所を意識し、転倒防止対策を講じておくことが重要であるが、**全ての転倒危険箇所をカバーするのは困難。**



耐滑用安全靴、作業靴

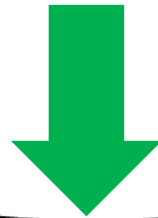
靴底と床面による転倒リスク

転倒
リスク

摩擦抵抗値が低すぎるため「滑り」による転倒災害のリスク大

逆に摩擦抵抗値が高すぎるため「つまづき」による転倒災害のリスク大

動摩擦係数0.4~0.5付近が最も転倒リスクが低く、作業に適している



歩行面（靴底-床面間）の摩擦抵抗値

耐滑用安全靴の選択

一般的には、摩擦係数が高すぎる安全靴は「つまづき」による転倒災害の原因となるとされているが、実際には、安全靴のグリップが良過ぎることにより、作業者がつまづき転倒した災害は、ほとんど発生していない。

転倒災害を防止するためには、基本的に「**対滑用安全靴**」として販売されている靴を選択することが正解と考えられるが、油、水等を使用する作業場等の床面の状況によっては「**耐油用安全靴**」等の選択を検討する。

安全の見える化で転倒災害防止



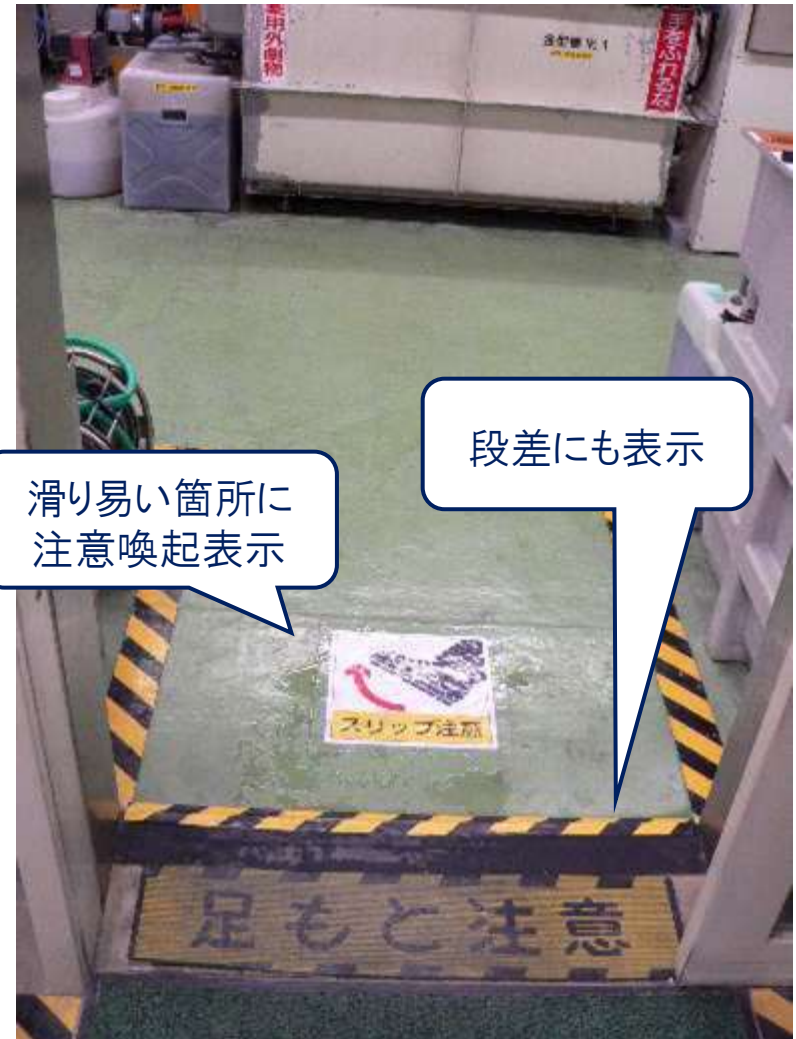
手すり使用の
意識付けを行う



左側通行と
注意喚起の表示



安全の見える化で転倒災害防止



転倒災害防止対策（ソフト面）

- 4 S（整理・整頓・清掃・清潔）の徹底
 - ・ 不要なものを作業スペースに置かない
 - ・ 通路を確保する
 - ・ 床面の水等を放置せず、拭き取る

4 Sが徹底されていない作業場では、本来、置くべきでない所に物が置かれている等により「つまづき」が発生しやすい。

また、物を探すのに時間がかかる等、作業効率も低下する。

転倒しにくい歩き方

- 歩幅を小さく

歩幅が大きくなると重心移動が大きくなり、体の揺れも大きくなる。

- 慌てずゆっくり

時間に余裕を持って行動する。特に積雪時等は普段より移動時間がかかることに注意。

- 靴裏全体を付ける

設置面積が大きいほどグリップ力が大きい。

- 注意力を保つ

歩きスマホ等は足元への注意力を奪う。

冬季に多発する転倒災害

滋賀県においては、年に数回程度ではあるが降雪量が多くなることがあり、積雪、路面の凍結等を原因とする転倒災害が集中的に発生するため（降雪量が多い年は、路面凍結、積雪等に起因する転倒災害が20件近く発生し全災害件数の15%程度を占めることとなる）、積雪時は特に転倒災害に注意が必要。



冬季の転倒災害防止対策

- 天気予報に注意

寒波が予想される場合は早めに対策を講じる。

- 駐車場の除雪、融雪

駐車場からの移動中に転倒していることが多い。除雪、融雪により安全通路を確保する。

- ゴム底の靴

一般的な革靴は雪道では滑りやすい。

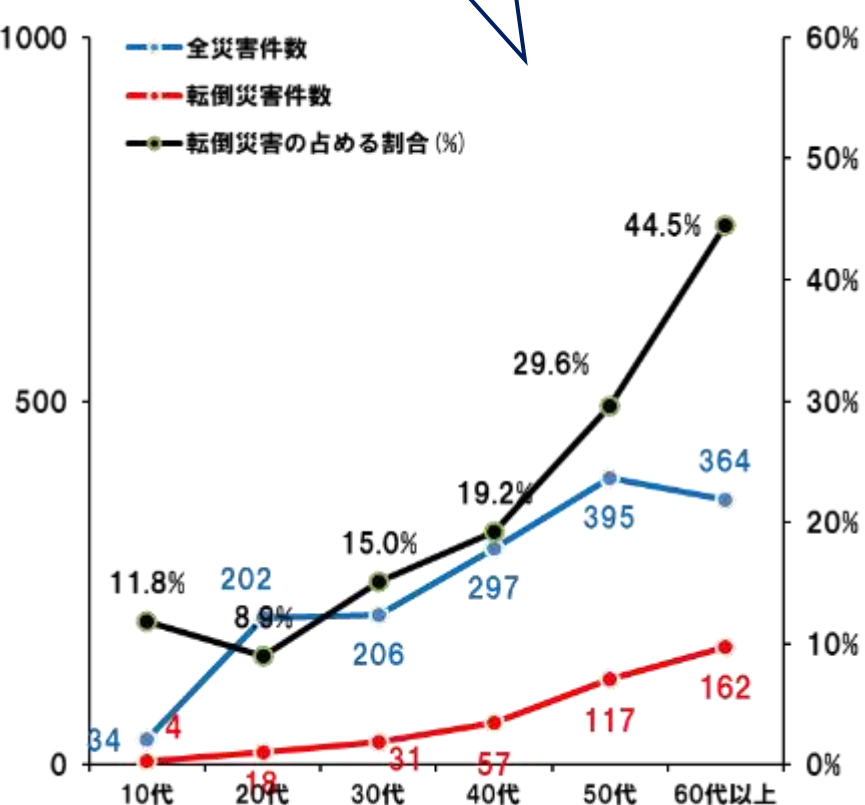
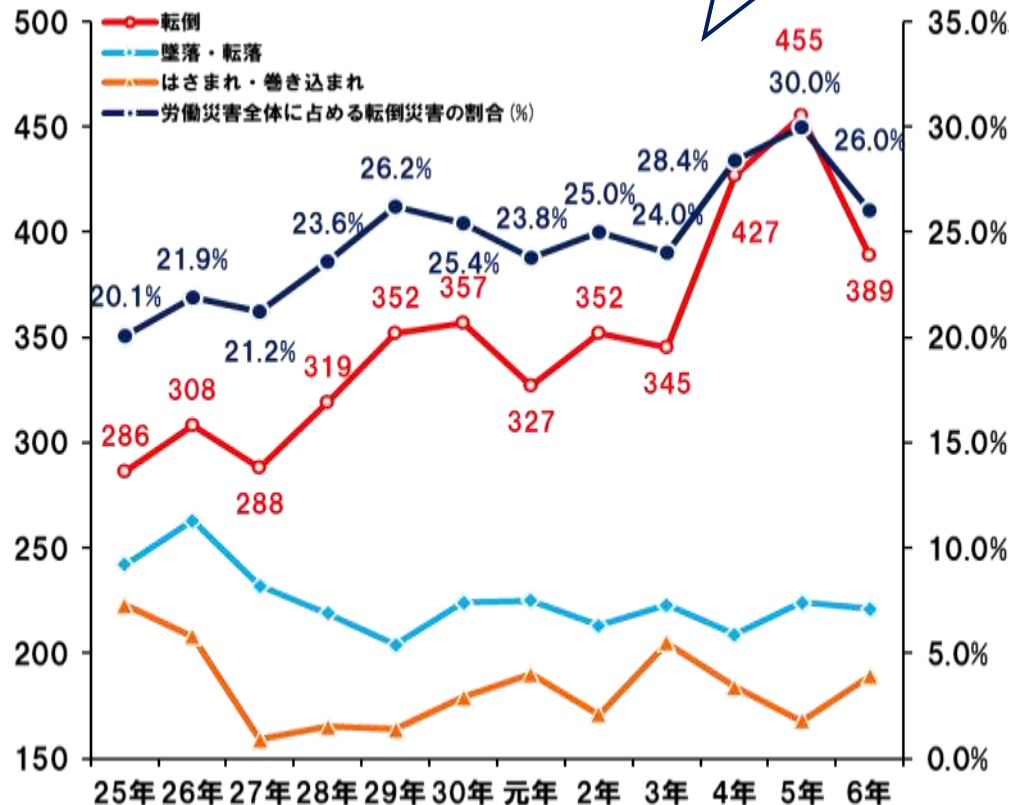
- 照度の確保

冬季は日が短いため、駐車場等の屋外の電灯は早めにつける。

高齢者ほど転倒リスク大

転倒災害は
近年、増加傾向
過去10年で1.6倍

高齢者ほど
転倒リスク大



転倒を回避するために必要な身体能力

足が滑った際にバランスを取る、つまずいた際に前に足を出す、踏み外した際に周囲の物を把持する、これらを咄嗟に行うためには、**反応の速さ、柔軟性、筋力、バランス能力**が必要。

しかしながら、これらの身体能力は加齢により低下していき、転倒災害の回避可能性を低下させることになる。

加齢に負けないよう、身体能力を維持、向上させるには適度な**運動、栄養、休息**が必要。

加齢によりデュアルタスク能力も低下

2つの要素に注意を向けることが求められる課題のことをデュアルタスクという。

同時に2つの情報を処理する際には、それぞれの課題に対して注意を配分したり、切り替えたりする力が必要となる。

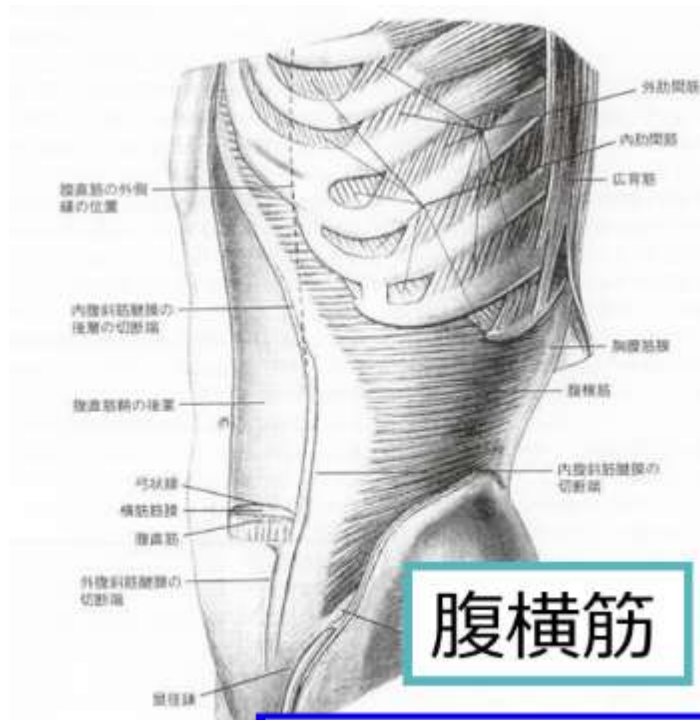


「歩き」
ながら
「バランスをとる」

高齢労働者の転倒災害防止対策

- 高齢労働者を基準に作業環境を整備
- 自らの体力、身体能力を把握、自覚させる
- 作業開始前のストレッチで柔軟性の確保
- 普段から補強運動を実施
- 反応速度向上には、短時間でも素早い運動を全力で実施
- デュアルタスク能力を向上させるためには有酸素運動が有効
- 仕事後の疲労感大の人は、筋力トレーニングと栄養（タンパク質、ビタミン）、水分摂取、睡眠、禁煙、節酒

補強運動 閉眼片足立ち60秒



腹横筋



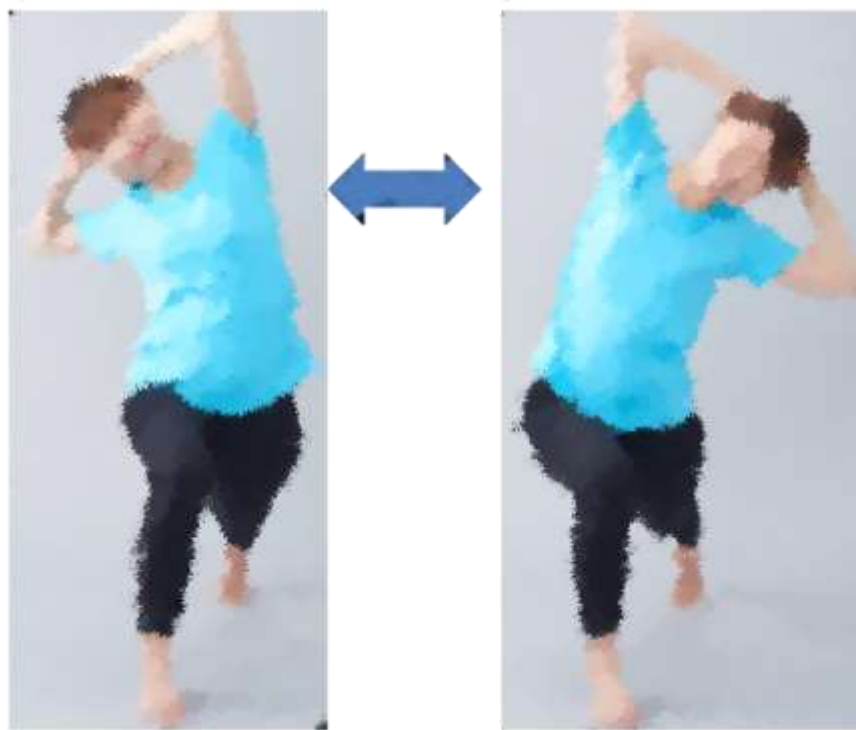
へそを引っ込めるイメージで
常時20%の力を維持

補強運動 エアプレーン



両手を交差させ膝を引き上げてから、両手を横に広げ上体を前傾させながら片足を後ろに上げて、頭から足までを一直線にする。5秒間止まる。

補強運動 ピッチャーバランス



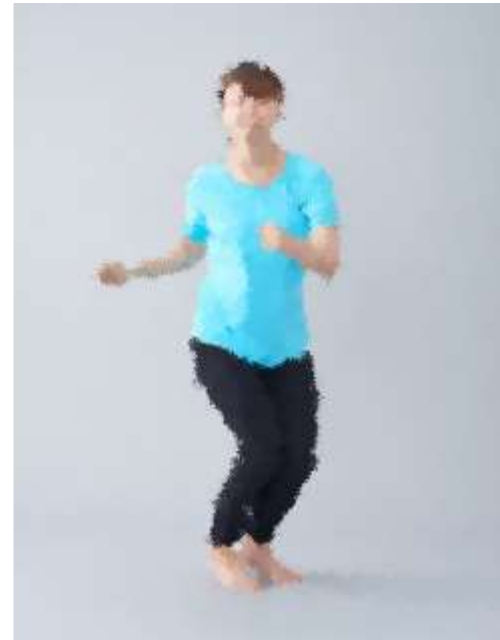
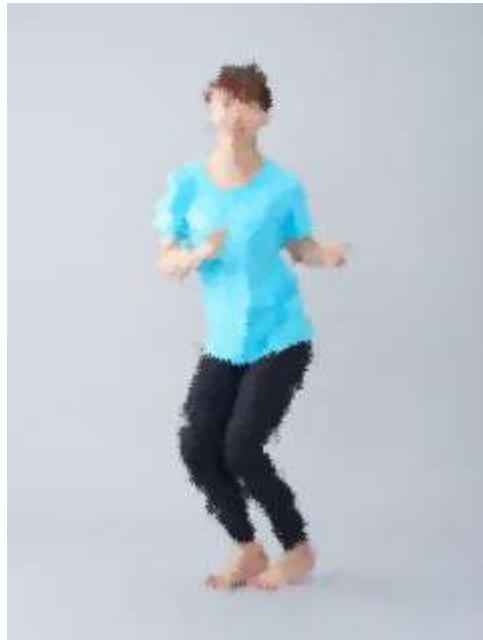
一直線上に両足を置き、両手を頭の後ろで組み、上体を左右へゆっくりと10回動かす。

補強運動 その場ダッシュ



両手を振って、足もしっかり上げ、地面を強く叩く
10～30秒間

補強運動 ツイスト



リズムカルにツイストする。

両手を曲げて、両足の拇指球を支点とする。

始業終業時 ストレッチ



a. 左脚に対して右脚を交差させ、曲がった右膝を両手でつかみます。この姿勢からお尻を後に突き出すと左太ももの後がピンと張ってきます。

痛い～気持ち良い程度で、反動をつけずに10秒間伸ばします。

b. 次に、両手を左足方向へ10秒間伸ばしましょう。

反対も同様に行います。



両手を膝の後ろで組み、そのまま膝をしっかりと伸ばします。10秒間、痛くない範囲で伸ばします。

主動作筋(この場合は大腿四頭筋)の最大収縮時に拮抗筋(この場合はハムストリングス)を抑制させるという相反神経支配の作用を利用したストレッチです。

転倒等リスク評価セルフチェック

転倒等リスク評価セルフチェック票			
※赤枠の箇所のみ入力ください。		名前 <input type="text"/>	年齢 <input type="text"/> 身長 <input type="text"/>
I 身体機能計測結果			
①【歩行能力・筋力】 ★2ステップテスト★ ～歩行能力・下肢筋力を把握～ スタートラインから最大2歩目のつま先までの距離をcm単位で測定します。(mmは四捨五入) 2回測定し、良いほうの測定距離を身長で割ります。(赤枠には測定距離のみ入力ください。自動計算されます。)			
2ステップテスト1回目 →	<input type="text"/>	CM	
2ステップテスト2回目 →	<input type="text"/>	CM	
評 価	<input type="text"/>		
②【敏捷性】 ★座位ステッピングテスト★ ～素早く足を動かせるか～ 背もたれがある回転しない椅子に腰かけ、足元に30cm幅のラインを引き、その内側に足を置き、「ラインの外側→内側」が1回とカウントして20秒間で何回開閉できるか測定します。			
座位ステッピングテスト →	<input type="text"/>	回/20秒	
評 価	<input type="text"/>		
③【動的バランス】 ★ファンクショナルリーチ★ ～バランスを崩さずにどのくらいからだを傾斜できるか～ 両足を軽く開き、両腕を肩の高さまで持ち上げ、その位置からバランスを崩さずに、水平に両手を伸ばした地点までの距離をcm単位で測定します。つま先立ち可。2回測定し、良いほうの測定距離を評価。			
ファンクショナルリーチ1回目 →	<input type="text"/>	CM	
ファンクショナルリーチ2回目 →	<input type="text"/>	CM	
評 価	<input type="text"/>		

転倒災害防止チェックリスト

	チェック項目	☑
1	通路、階段、出口に物を放置していませんか	<input type="checkbox"/>
2	床の水たまりや氷、油、粉類などは放置せず、その都度取り除いていますか	<input type="checkbox"/>
3	安全に移動できるように十分な明るさ（照度）が確保されていますか	<input type="checkbox"/>
4	転倒を予防するための教育を行っていますか	<input type="checkbox"/>
5	作業靴は作業現場に合った耐滑性があり、かつ、ちょうど良いサイズのものを選んでいますか	<input type="checkbox"/>
6	ヒヤリハット情報を活用して、転倒しやすい場所の危険マップを作成し、周知していますか	<input type="checkbox"/>
7	段差のある箇所や滑りやすい場所などに注意を促す標識をつけていますか	<input type="checkbox"/>
8	ポケットに手を入れたまま歩くことを禁止していますか	<input type="checkbox"/>
9	ストレッチ体操や転倒予防のための運動を取り入れていますか	<input type="checkbox"/>

社会福祉施設における 安全衛生自主点検 好事例のまとめ

安全衛生自主点検の実施

近年の社会福祉施設における労働災害の増加傾向を受け、彦根労働基準監督署において社会福祉施設における安全衛生自主点検表を作成し、管内の社会福祉施設への配布を行った。

各施設が自主点検を実施し、安全衛生管理上の問題点等を把握することで、自主的な改善を促すとともに、行政として安全衛生管理状況を把握し、労働災害防止対策等の好事例を収集することにより、今後の労働災害防止に資することを目的とするもの。

自主点検表を送付した387事業場のうち、281事業場から回答が得られた（回答率75.7%）。

自主点検結果・好事例集

令和3年度

社会福祉施設における安全衛生自主点検の結果
及び安全衛生活動に係る好事例集

彦根労働基準監督署

社会福祉施設の安衛活動の好事例

自主点検及び実地での聞取り等により、多数の好事例を収集することができ、以下のカテゴリーに分類して掲載している。

- 安全衛生管理体制に関するもの
- 一般的な安全衛生管理活動に関するもの
- 転倒災害防止対策に関するもの
- 腰痛災害防止対策に関するもの
- 安全衛生教育に関するもの
- その他

安全衛生管理体制の好事例(1)

- 労働安全衛生法で定められた（安全）衛生委員会に加えて、各職場のリーダー、サブリーダーにより構成される主任者会議を組織し、各部署の問題点の共有化、活動の水平展開等、より現場に近い内容の協議、検討を行っている。
- 事業場の全職員が参加する職員会議を毎月開催し、安全衛生活動に関する議題等の協議を行っている。

安全衛生管理体制の好事例(2)

- 労働安全衛生法で定められた（安全）衛生委員会に加えて、感染症対策委員会、事故防止委員会、等、**テーマごとに各種委員会を設置し**、個別の問題解決の力の向上を図っている。特に、職場環境改善委員会は、安全な作業方法の確立等にも積極的に取り組んでいる。
- 複数の社会福祉施設を運営する法人において、各施設の衛生管理者を構成員とする**衛生管理者会議**が組織、運営されている。会議では法人全体として、定期健診有所見率の改善、腰痛災害防止対策、受動喫煙対策等が協議されている。

安全衛生管理体制の好事例(3)

- 複数の社会福祉施設を運営する法人において、法人内で発生した労働災害の情報を共有し、同種災害の防止を図っている。
- 衛生管理者に加え、別の担当者を安全推進者として選任し、より専門的に労働災害防止活動に取り組むことができる体制を構築している。
- 衛生管理者、安全衛生委員等が行う職場巡視をより効果的にするため、安全衛生点検表を作成、職場巡視に活用している。（参考資料2）

安全衛生管理体制の好事例(4)

- 衛生管理者、安全衛生委員等が行う職場巡視において指摘があった事項について、安全衛生委員会において改善状況の管理を行っている。
- 施設利用者及びその家族からのハラスメント行為への対応について、安全衛生委員会の協議事項とし、労働者個人として抱え込まないよう努めている。

一般的な安全衛生活動の好事例(1)

- 年度ごとに安全衛生活動計画を策定し、実施時期及び実施状況が把握しやすい専用の様式1ページにまとめられている。(参考資料3)
- 労働災害が発生した際に災害発生原因、再発防止対策の検討を行うにあたって、効率的に検討を行えるよう、労働災害検討用の専用様式を作成、使用している。(参考資料4)

一般的な安全衛生活動の好事例(2)

- 施設利用者の安全確保に関するヒヤリハット活動は積極的に行われていたものの、低調であった労働者の安全確保に関するヒヤリハット活動の活性化を図るため、朝礼、各種委員会等の場において積極的な報告を呼びかけるとともに、労働者の安全確保用のヒヤリハット報告様式を作成している。

ヒヤリハット様式を作成、統一することで、安全衛生委員会での検討、討議が平準化できるというメリットもあった。（参考資料5）

一般的な安全衛生活動の好事例(3)

- ヒヤリハット報告の月ごとの件数を集計し、減少傾向が続いた場合は、朝礼等の場において、報告の徹底を呼び掛けている。
- 各種介助作業ごとに安全作業標準を作成している。作業標準は写真、図等を多用し、わかりやすいものとなっている。（参考資料6）
- 職場配置、シフトについて、労働者の年齢、体力、性格等を踏まえ、入浴介助作業、夜勤業務の実施回数に配慮している他、別の職種への変更を行うこともある。

一般的な安全衛生活動の好事例(4)

- 介護労働者の介助に係る負担を低減するため、施設利用者のベッド下部にセンサーを取り付け、事務所等の離れた場所からでも、施設利用者の状態を把握できるシステムを導入している。



一般的な安全衛生活動の好事例(5)

- 設利用者の特性、介助作業時の注意事項をまとめた作業標準を作成するとともに、施設利用者のベッド付近を設置することで、作業標準の徹底を図り、また、担当労働者の交代にも容易に対応できるようにしている。



一般的な安全衛生活動の好事例(6)

- 施設利用者の移動する距離をなるべく短くするような座席配置を行うことで、移動介助の距離を短縮化し、転倒リスクの低減を図っている。
- 調理作業における包丁等による手指の創傷災害を防止するため、防刃機能を有する手袋を採用、使用している。
- 夏季の熱中症災害を防止するため、労働者への水分補給の徹底を指示するとともに、作業場内への扇風機の設置を行っている。

一般的な安全衛生活動の好事例(7)

- 損害保険会社から毎月提供される交通安全マンスリーレポートを回覧、周知し、送迎業務等の際の交通労働災害の防止を図っている。
- 作業場所とは別の場所に労働者がくつろぐことができる休憩場所を設けている。



一般的な安全衛生活動の好事例(8)

- 作業場内の4 S（整理、整頓、清掃、清潔）の維持を図るため、各職場の一定の役職の者を4 S担当者として選任している。
- 3 S活動（整理・整頓・清掃）を「頭の中の整理・整頓・清掃」「ケア情報の整理・整頓・清掃」「職場の身の回りの整理・整頓・清掃」の3種類に分類した上で実施している。
- 無災害記録ボード（連続無災害日数を示す物）を設置し、各労働者に労働災害防止に関する意識付けを図っている。

転倒災害防止対策の好事例(1)

- 労働者、施設利用者、外来者等が、施設の玄関において靴を履き替える際にバランスを崩して転倒する危険性が考えられたため、座って靴の履き替えができるよう、玄関に椅子とマットの設置を行った。



転倒災害防止対策の好事例(2)

- エアコンから結露した水分等が落下し、床面が濡れることでの「すべり」による転倒災害を防止するため、エアコン吹出口下部へのカバー、タオルの設置を行っている。



転倒災害防止対策の好事例(3)

- 作業場内で使用する履物は、各人の足のサイズと一致する、**踵のあるスニーカー等**を基本とし、靴裏の摩耗、破損状況等の状況も定期的に確認している。
- 浴室や水回り等、床面が濡れやすい箇所について、**マットを設置**している。

転倒災害防止対策の好事例(4)

- 浴室の濡れた床面での「すべり」による転倒災害を防止するため、浴室の床面にすべり止め塗装を施した。

すべり止め塗装に使用した塗料は、広く一般に販売されているものであるとのこと。



転倒災害防止対策の好事例(5)

- 浴室の濡れた床面での「すべり」による転倒災害を防止するため、浴室内で使用する履物としてマリンシューズ（海岸等での使用を想定した濡れた床面でも滑りにくい靴）を採用、使用している。



転倒災害防止対策の好事例(6)

- 浴室や水回り等、床面が濡れやすい箇所について、**こまめに拭き取り作業**を行うこととし、**徹底を図るための表示物の設置**を行っている。



転倒災害防止対策の好事例(7)

- 階段、ドア開閉、通行時のすれ違いの際の接触による転倒、転落を防止するため階段を左側通行とし、徹底を図るための表示物の設置を行っている。



転倒災害防止対策の好事例(8)

- 転倒災害が発生しそうになった際の最大の回避要因を「**咄嗟の一步が出せるかどうか**」と考え、安全衛生委員会での検討、各労働者への教育、周知等を行っている。
- 転倒災害（特に冬季）を防止するため、**時間に余裕を持って通勤、行動を行うよう教育、周知**を行っている。

腰痛災害防止対策の好事例(1)

- 移乗作業は、施設利用者の移乗能力を最大限生かし、**極力、抱え上げを行わない**作業方法を採用している。
- 腰痛予防のため始業時のラジオ体操を導入していたが、始業時前後の時間帯は業務が忙しいことが多いため、ラジオ体操ではなく、**理学療法士考案のポイントを絞ったストレッチ**を採用し、短時間で効果的な体操を実施している。

腰痛災害防止対策の好事例(2)

- 福祉用器具として、スライディングボード、シートを導入しているが、必要なタイミングで器具を手にとれるよう、目につきやすい保管場所を設定し、福祉用器具の確実な使用を促している。



腰痛災害防止対策の好事例(3)

- 移乗用リフトの積極的配置を推進し、全居室の半分以上に移乗用リフトを設置している。
- 移乗用リフト等の比較的大型の福祉用器具について、床面にラインを引き、保管場所を明確化することで、作業者が使用しやすい環境の整備を図っている。

腰痛災害防止対策の好事例(4)

- 福祉用器具として、**パワーアシストスーツ**を採用し、介助作業を担当する労働者の負担軽減を図っている。



腰痛災害防止対策の好事例(5)

- 介助作業の際の負担の大きい施設利用者に対しては、2人での介助作業を徹底し、場合によっては3人での介助作業を行うことで、負担軽減を図っている。
- 一般の定期健康診断に加えて、腰痛予防対策指針に基づく腰痛健康診断を実施している。

安全衛生教育の好事例(1)

- 新規採用時に安全衛生教育を実施していることに加え、採用後2、3、4年目の職員に対しても安全衛生教育を実施している。
- 新規採用労働者を対象に、介護福祉士の資格取得を目標として計画的に研修、講習を行っている。
- 各職場のリーダー、サブリーダー等の管理的な労働者に対する安全衛生教育を実施している。

安全衛生教育の好事例(2)

- 社会福祉施設向けの動画教材を制作している業者と年間契約を行い、各労働者に、定期的に、必要に応じて随時視聴させることで効果的な教育を実施している。
- 毎月1回、医薬品、リハビリテーション、感染症対策等のテーマを変えながら、全職員を対象とする研修を継続的に実施している。
- 新規採用者1名に対して、教育担当者を1名選任し、マンツーマン指導を行っている。

安全衛生教育の好事例(3)

- ハサミ、カッターナイフの使用による創傷災害を防止するため、安全衛生教育を実施している。
- 送迎業務時等の交通労働災害防止を図るため、自動車教習所に設置されているような安全運転シミュレーターを使用した交通安全教育、訓練を定期的の実施している。

その他の活動の好事例(1)

- 定期健康診断の有所見率の改善を図るため、有所見者に対して、保健指導の受診、週2、3回の適度な運動の推奨を行っている。
- 事業場内にウォーキングマシン、懸垂器、ベンチプレス、ダンベル、トランポリン等を備えたジムを設置し、労働者の健康増進に配慮している。
- メンタルヘルスケアの充実を図るため、労働者から気軽に相談できる体制を構築している。

ゼロ災滋賀ロゴマーク

最近の労働災害の増加傾向を受け、安全衛生意識の高揚を図るため、滋賀労働局では、ゼロ災滋賀ロゴマークを制定し、事業場での使用を奨励している。滋賀労働局のHPにおいて、卓上カレンダー等のデータと併せて公開している。

